

当日は、21世紀ひょうご市民学会のメンバーが13名参加したが、天気も良く盛会であった。

この見学旅行で私が感じたことをまとめてみた。

企画は松原さんが立案し、天王寺案内ボランティアの山口さんがみんなを案内して決行された。

私は、30歳ぐらいまで大阪の南のほう天下茶屋に住んでいたもので、何回も天王寺さんにお参りしていた記憶がある。また、家内の兄が瓦屋町（上本町6丁目から西に下る。）に住んでいて、結婚後もこの辺には何度も来ている。

ところが、今回の見学で初めて来たところがたくさんあり、しかも近くに来ていたが、訪れることもなく帰ってしまっていたところがたくさんあるのに気づかされた。また、来たことがあるのに、記憶していたところとは大きく違って、初めての発見をしたところも多かった。

あべのハルカスビルは、最近立ったので、それだけを見に訪れたことはあるが、確かに高いビルであり、象徴的な建物である。通天閣は、いろんな話や映画に出てくるので、なじみがあった。

この2つの建物に比べると、四天王寺はこれまで行ったこともない建物があって、その説明を聞いてなるほどと感心させられた。

まず、四天王寺である。中門から入ったが、休憩所を経て、まず英霊堂という名に代わっている鐘楼が見えた。昔はここに世界一の大きな釣鐘を入れていたそうである。

口径 4.8m、高さ 7.9m、重さ 157t という大きさで1回ついただけで、環境を乱すというので戦時中供出されたとのことである。

亀の池に出るとここは思い出がある。

石の上に甲羅干しをしている亀の姿に子どもころを思い出した。傍の石舞台も覚えている。

金堂の改修中で本堂として利用されている六時堂はあまり覚えていない。経木流しのところは、ほとんど記憶にない。水の中に入れると浮かび上がってこないものもあるが？浮かび上がると天国に行っているのだという亀井堂では、沢山の人が並んで水に入れる順番を待っていた。

番匠堂という建築職人の守護神をお祭りした小さなお堂があるが、ここに「南無阿弥陀仏」と書いた旗が並んでいるが、それらの文字は大工道具の形を表わしている。よく見ると「かねざし」であったり「のみ」であったりいろんなものが並んでいる。寺社建設の大手で最も古い企業が「金剛組」で西暦 578 年の設立である。

南大門は、難波から飛鳥への大道に面しており、ここから熊野権現が礼拝できる礼拝石がおかれている。

しかし、人通りが多いのは西門であり交通に便利な方角にある。日本の3大鳥居の一つ（重文）には、「釈迦如来 転法輪処 当極楽土 東門中心」と書かれた額がかかっている。ここからは、お彼岸の中日には石の鳥居の真ん中に沈む夕日が見られる。

大きな釣鐘の話が出たので、その形を残したお土産として「釣鐘まんじゅう」が今も売られているということで、一番小さな箱に入ったのを買って持ち帰った。

昼食は中華料理屋の2階で食べたが、11名が同じ米粉麺のラーメンのようなものと小籠包の、ランチを注文した。

そのあと午後からのスケジュールにはいった。

まず、すぐそばに天王寺動物園の美術館が見えるところに、茶臼山がある。また、和気清麻呂が上町台地を

横切る堀川を建設しようとして工事をしたが、未完成に終わった川底池というのがある。

ここは、大阪冬の陣で徳川家康が本陣を置いたところで、夏の陣では真田幸村が同じく本陣を置いている。

公園の中には、近くに住んでいた織田作之助の銅像があるが、これは井原西鶴の銅像のほうを向いている。織田作之助は井原西鶴を尊敬していたようで、その銅像を設置するときにそんな配慮がなされていたようである。

この向かいのほうに「存牟堂」があり、その名前は一心寺の住職であった存牟上人の名がつけられているが、ここは、一心寺の土地でここから西に一心寺の広い土地が伸びている。

存牟上人は三河の出身で徳川家康の恩寵を受けていたが、大阪夏の陣では高野山へ避難して

「帰りきてまたもや見なん坂の松 踏み荒らすなよもとの庵を」という和歌を残している。

存牟堂は休憩所となっていて、ここで、大坂の陣の布陣を8分間の映画にまとめたものを見せてもらった。沢山の仏像を並べてある三千仏堂というのもあり、表から中をのぞくだけで通り過ぎた。

さて、一心寺であるが、ここにはおじいさんのお骨を収めているので、その時に来た思い出はあるが、そんなに大きなお寺ではなかったように記憶していた。

ところが、近代的なしきたりのお寺で、周りには南方系の樹木（ジャカランダ）が植えられ、入り口には門の上に美術的な像があり、中も立派である、大阪の陣で家康を幸村が追い詰めあわや討ち取らんとしたときに、霧が立ち込めて逃がしてしまったという言い伝えがある。

その時の武将の一人、本多忠朝の墓があり断酒の祈祷のしゃもじが多数供えられている。

この横を東西に通っている道が逢坂で、天王寺七坂の一つで、ここから北へ坂道が何本も続いている。

上町台地は西のほうで、瀬戸内からの波で洗われ急な坂になっているが、東のほうは昔入り江になっていたため傾斜は緩くなっている。私たちが歩いたのは西斜面であるので、坂を少し下ると今度は上ってくるのが大変なので、途中から下の松屋町筋を見下ろして引き返した。

真田幸村が戦死した場所である安居神社の御祭神は菅原道真公であるが、境内には真田幸村の銅像がある。天神坂から桜の木がきれいなところがあつたが、まだ少し早くて見られなかった。

つぎは、清水坂で坂の上には清水寺ある。上まで上がるのは大変なので下にある滝を見に行った。京都の清水寺と同じような修行用の滝があり、見上げると清水の舞台も見ることが出来た。

愛染坂の途中には愛染堂があり、ここには有名な「あいぜん桂」がある。映画のテーマにもなった有名な樹木であるが、桂の木に「のうぜんかつら」が巻き付いていて、「のうぜんかつら」はきれいな花が咲くので有名できっと花のころはきれいだろうと思った。

ところが桂も「のうえんかつら」も枯れてしまっているのではないかとと思われるぐらいの老木である。

近くに墓標があり、それは京都から移り住んだ新古今集の撰者の一人藤原家隆が、この夕陽丘から沈む夕日を眺めていたということである。

夕陽丘学園という学校の建物が見えたが、昔から有名な公立の夕陽丘高等学校とは違うものだそうである。

口縄坂というのがあるが、これは蛇のようなくにやくにゃした形の坂道であったことから、そのように名づけられたものである。

お寺の並んでいる道を歩いたが、十三まいりののぼりがたっていて、七五三の風習は関東から来たものだろうで、大阪は子どものお祭りは、十三まいりだそうである。

途中、てんのうじ観光ボランティアがいと協議会のある建物に入って、一服したが休日で誰もいなかった。

最終地は、生国魂神社であるが、ここではみんなやれやれという顔つきで、最後は喫茶店でコーヒーでも飲もうということで谷町九丁目の地下鉄乗り場近くの店へ入って休憩して解散した。 おわり